

令和元(2019)年度水稻生育診断予測事業速報No.3

(早植栽培 6月21日調査結果)

令和元(2019)年6月24日

栃木県農政部経営技術課

 **宇都宮のコシヒカリの出穂は7月29日頃の予想(宇都宮の平年は8月1日)。**

 **今後は間断かん水を継続する。**

 **イネ縞葉枯病の防除を徹底する。**

1 気象概況<<6月上旬~中旬(宇都宮)>>

6月の平均気温は上旬が平年より0.8℃高く、中旬は0.2℃低く経過した。降水量は、上旬が平年比186%、中旬が120%であり、多く経過した。日照時間は、上旬が平年比71%、中旬は145%で、特に第2半旬は48%と少なかった。関東甲信地方の梅雨入りは6月7日頃で、平年より1日早く、昨年より1日遅い。(【参考】梅雨明け:平年7月21日頃、昨年:6月29日頃)

2 調査結果<<早植栽培、品種:コシヒカリ>>

(1) 全体の生育(11か所平均:平年値 \bar{x} - σ 欠、及び生育不良地点除く)(表3、図1~2)

草丈は平年並(平年比100%)、茎数はやや多く(105%)、葉齢は平年並、葉色は0.3淡い。地域によりバラツキがあるが、葉齢から判断して生育は平年並と考えられる。生育診断値(葉色 \times 茎数)は平年比99%で平年並である。

(2) 分施肥体系の生育(7か所平均:平年値 \bar{x} - σ 欠地点を除く)(表3、図1~2)

ア 草丈は51.1cmで平年比103%とやや長く、茎数は558本/m²で平年並である。
イ 葉齢は9.9葉で平年より0.1葉多く、葉齢から判断すると生育は平年並と考えられる。

ウ 葉色は3.9で平年より0.4淡い。

エ 葉色 \times 茎数値は2,192で平年より小さい(平年比90%)。

オ イネドロオイムシが4か所で確認されているが、発生程度は低い。

カ 宇都宮市でイネ縞葉枯病の発生が確認されている。

キ 真岡市で葉いもちが確認されている。

(3) 全量基肥体系の生育(4か所平均:平年値 \bar{x} - σ 欠、及び生育不良地点除く)

(表3、図1~2)

ア 草丈は52.1cmで平年並、茎数は601本/m²で平年比112%と多い。

イ 葉齢は9.8で平年並、葉齢から判断すると生育は平年並である。

ウ 葉色は4.3で平年並である。

エ 葉色 \times 茎数値は2,563で平年より多い(平年比116%)。

オ イネドロオイムシが4か所で確認されているが、発生程度は低い。

3 出穂期予測

(1) 幼穂分化期（農業試験場（宇都宮市）、6月24日現在）（表1）

- ア 「初星」は6月22日で平年より1日遅い。
 イ 「なすひかり」、「コシヒカリ」及び「とちぎの星」の幼穂分化は確認されていない。

表1 水稻品種の幼穂分化期(6月24日現在、農業試験場)

	初 星	なすひかり	コシヒカリ	とちぎの星
本 年	6月22日	未確認	未確認	未確認
平 年	6月21日	6月24日	6月29日	7月1日

(2) 6月23日現在の出穂期予測（表2、図3-1~2）

移植（5月4日）～6月23日までの積算平均気温は、宇都宮市では平年より78.0℃高く、大田原市では平年より66.8℃高かった。

今後、平均気温が平年並で経過した場合、平均気温から算出した生育ステージ（DVS値）による早植コシヒカリ（5月4日移植）の出穂期は表2のとおりである。これによると、宇都宮市で2～3日、大田原市3～4日程度早いと推定される（宇都宮出穂期の平年値は宇都宮で8月1日、大田原で8月6日）。

表2 DVSによる出穂期予測(6月23日現在、早植コシヒカリ(5月4日移植))

	今後の平均気温（平年との比較）		
	2.0℃高く経過	平年並	2.0℃低く経過
宇都宮市	7月26日～27日 (-5～-6日)	7月29日～30日 (-2～-3日)	8月3日～4日 (+2～3日)
大田原市	7月30日～31日 (-7～-6日)	8月2日～3日 (-3～-4日)	8月7日～8日 (+1～2日)

4 技術対策

(1) 水管理

目標とする茎数はほぼ確保されている。全量基肥栽培では、茎数が多く生育診断値が平年より大きいため、中干しを行う。分施肥系栽培は、追肥までは間断かん水を継続して葉色を維持する。また、移植から湛水状態を継続しているほ場では、早急に間断かん水を実施する。ただし、施肥体系、地域により生育にバラツキがあるため、生育診断値が指標値を上回っている場合は、今後の天候を加味すると、中干しを実施して診断値を適正範囲内に収めることが必要と考えられる。

気象庁地球環境・海洋部発表令和元6月20日発表の「関東甲信地方 1か月予報」（6月22日～7月21日の天候見通し）では、“平年に比べ曇りや雨の日が多い”とあり、向こう1か月の平均気温は平年並の確率が40%と予想されている。また、令和元年5月24日発表の「関東甲信地方 3か月予報」では“向こう3か月の期間の平均気温は、高い確率40%”と予想されていることから、今後の冷害の可能性は低いと考

えられるが、低温になった場合に深水管理ができるよう、畦畔の漏水チェック等、今のうちから準備を進めておくことも重要である。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

「令和元（2019）年度 植物防疫ニュース（速報 No 1）」（令和元（2019）年 5 月 30 日農業環境指導センター発表）では、イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は 6.5%（平年値 6.9%）で、特に県中南部では、防除が必要とされる 10%を超える地点が複数確認され、県北部においても保毒虫率が徐々に上昇傾向にある状況である。本病の発生拡大を防ぐため、地域ぐるみでのヒメトビウンカ防除（発生の多い地域では、箱施用剤の使用＋本田での薬剤散布）を実施する。

イ いもち病（葉いもち）

農業環境指導センター発表（令和元年（2019）年 6 月 14 日）の「令和元（2019）年度病害虫発生予報第 3 号」によると、いもち病の発生予想は「平年並」である。BLASTAM（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2018.htm>）による葉いもち感染好適条件判定結果では、6 月に入って感染好適条件及び準感染好適条件が出現し始めている。常発地域や箱施用剤を使用していない地域では、ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努める。なお、いもち病の防除は、発生前の予防剤（粒剤）施用が効果的である。また、いもち病の発生源となる取置き苗は早急に処分する。

ウ 斑点米カメムシ類

本田内の除草及び水田周辺の草刈り（水稻の出穂 2～3 週間前と出穂期頃の 2 回）を行ってカメムシ類の発生しにくい環境を整え」とともに、出穂期以降に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は薬剤防除を行う。

エ ニカメイチュウ

心枯茎が目立つ場合には、第 2 世代幼虫の防除が必要である。6 月下旬に、ほ場当たり任意の 25 株を見取り調査して、葉鞘変色茎の発生株率が 20%以上の場合は、防除を行う。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）



気象災害による農業被害を未然に防ぐため、
技術対策情報が 携帯電話等に直接メール 配信される
「とちぎ農業防災メール」の御登録をお願いします！

併せて、気象警報・注意報等が直接メール 配信される
「栃木県防災メール」の御登録をお願いします！



↑「とちぎ農業防災メール」
登録はコチラから



↑「栃木県防災メール」
仮登録はコチラから